

HOKKAIDO UNIVERSITY CAMPUS SITES / 1990

北大構内の遺跡

— 昭和64・平成元年度 —



8

北海道大学

平成元年度

北海道大学埋蔵文化財プロジェクト委員構成

朝日田 康 司 (農学部 家畜飼養学講座 教授)

石 本 聿 利 (理学部 生物化学講座 助教授)

羽田野 正隆 (文学部 基礎文化論講座 教授)

林 謙 作 (文学部 北方文化研究施設 助教授)

吉 崎 昌 一 (文学部 基礎文化論講座 助教授)(主任)

北海道大学埋蔵文化財調査室 (責任者 吉崎昌一)

北海道札幌市北海道大学内 (施設部気付)

電話 011-716-2111 内線 2671, 3548

(FAX 011-758-7531 人類学吉崎研究室あて)

北大構内の遺跡

HOKKAIDO UNIVERSITY CAMPUS SITES

8

昭和64・平成元年度

北海道大学

序

かつて、我がキャンパスの敷地にはニレとミズナラの巨木が生い茂り、その間を清冽なサクシュコトニ、セロンベツの両河川が縫っていた。そこには、銀鱗を躍らせてサケが遡上し、太古の人々が安らかな生活を送っていたのである。当時の痕跡は、深く地中に眠る古代の遺跡のほか、中央ローンを横切って流れる河川、所々に残る大木などにうかがわれる。

私の後の棚には、埋蔵文化財調査室の手で修復された1000年前のほぼ完全な土器が置かれている。学内から出土したもので、擦文時代に属するものと言う。ハンドメイド特有の穏やかなデザインで、なかなかの優品であると同時に、疲れた私の神経を太古からの緩やかな時間の流れに接続し、人間的な感情に浸らせてくれるコンバーターの機能ももっているようである。また、学問は常に歴史的な蓄積のうえに成り立っていることを、この太古の土器が語りかけてくようにも思えるのだ。

今年も我がキャンパス内から発見された幾多の出土資料についての研究報告が出来あがった。こうした資料はすべて埋蔵文化財調査室に保管され、一部は展示されている。昨年は、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどから多数の研究者がこの標本を観察するために来学したし、また、国際交流基金による長期滞在研究者の受け入れを依頼されるなど、学術交流も活発になってきていることは、まことに喜ばしい。この報告書が、これまで以上に研究発展の一助になり、交流の一端を担うことが出来れば、幸いである。

1990年3月25日

北海道大学長

伴 義 雄

目次

序	3	I-5 札幌地区等情報ネットワーク 設備工事予定地の調査	14
平成元年度の事業報告		I-6 薬学部周辺整備工事予定地の調査	16
I-1 調査および保存事業の報告	7	■附篇-1 『北大構内の古代遺跡分布について』	21
I-2 法学部校舎増築予定地の予備調査について	8	■附篇-2 『サクシュコトニ川遺跡出土の 植物遺体資料』	23
I-3 教養部教養食堂増築予定地の調査	10	あとがき	36
I-4 医学部附属病院棟等新営工事予定地の調査	12		

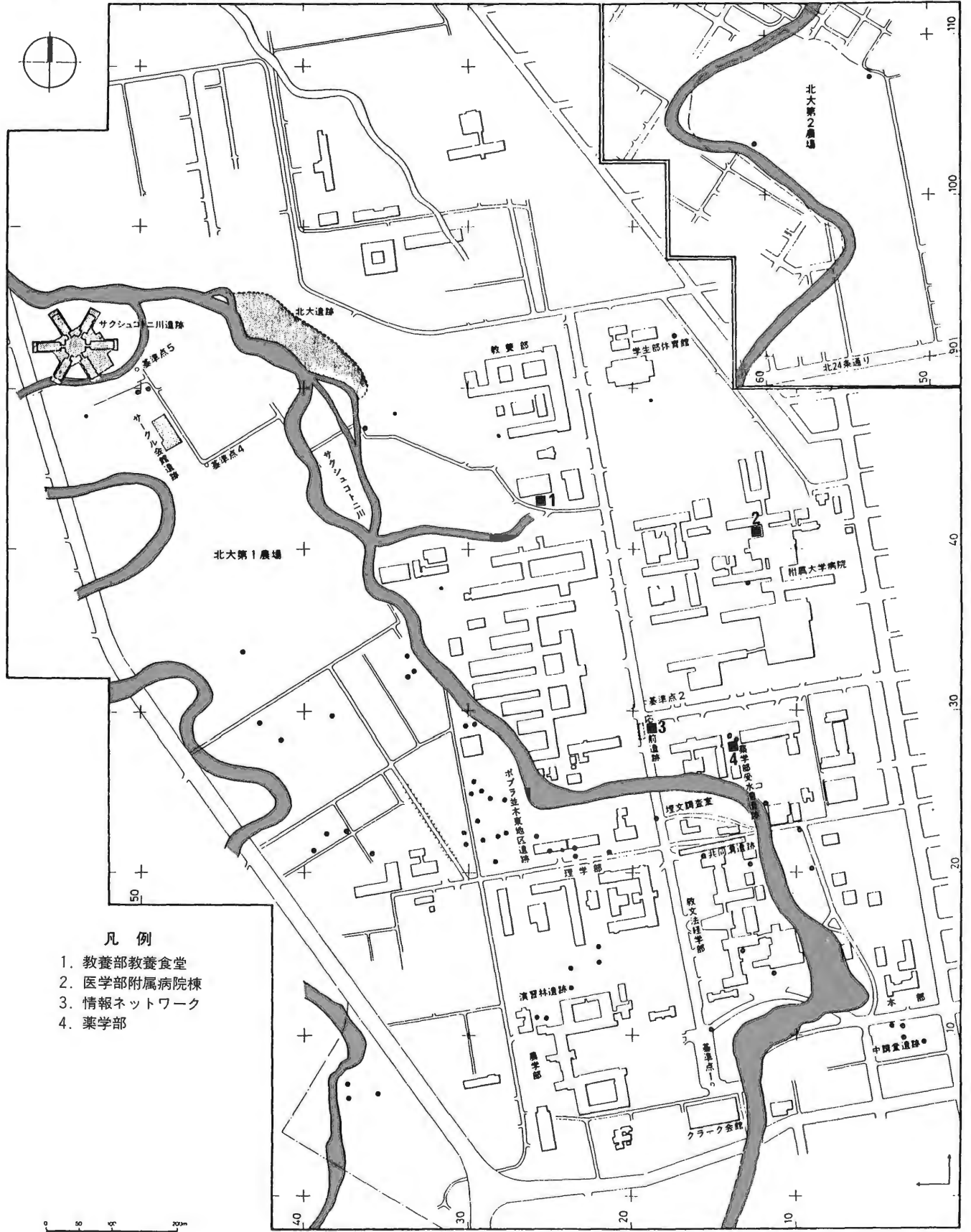
《図目次》

第1図 北大構内図	6
第2図 法学部校舎増築予定地の予備調査	8
第3図 法学部校舎増築予定地の発掘状況	9
第4図 教養部教養食堂増築予定地の調査	11
第5図 医学部附属病院棟等新築 工事予定地の調査	12
第6図 医学部附属病院棟新営工事 予定地の調査状況	13
第7図 札幌地区等情報ネットワーク 設備工事予定地の調査	14
第8図 札幌地区等情報ネットワーク設備工事予定地 の調査状況	15
第9図 薬学部周辺整備工事予定地の調査	16
第10図 薬学部周辺整備工事予定地の調査	17
第11図 薬学部周辺整備工事出土	18
第12図 薬学部周辺整備工事予定地出土の 土器拓影	19

附篇-1 《図・表目次》

第I図 時期別遺跡分布	22
附篇-2 《図・表目次》	
第1表 教養部教養食堂増築予定地の出土遺物	10
第I図 擦文文化にともなった炭化種子	32
第II図 擦文文化にともなった炭化種子	33
第III図 擦文文化にともなった炭化種子	34
第IV図 擦文文化にともなった炭化種子	35

第1図 北大構内図



平成元年度の事業報告

I-1 調査および保存事業の報告

(1) 平成元年度に本調査を行った地区は、以下に記す4箇所であり、詳細はI-3・4・5・6に示す通りである。

- 1 教養部教養食堂増築予定地
- 2 医学部附属病院病棟等新営工事予定地
- 3 札幌地区等情報ネットワーク設備工事予定地
- 4 薬学部周辺整備工事予定地

(2) 平成元年度に予備調査を行った地区は、以下に記す1箇所であり、詳細はI-2に示す通りである。

- 5 法学部校舎増築予定地

(3) 平成元年度に工事中立会を行った地区は、以下に記す5箇所である。

- ① 北海道大学構内道路補修工事現場
(クラーク像の南東側) ————— 8月27日
- ② 農学部他電話幹線改修工事現場 — 9月27・28日
- ③ 生協前, 柴田記念館前電話幹線
改修工事現場 ————— 10月3日
- ④ 教育学部フェンス新営工事現場 ——— 10月11日
- ⑤ 国際交流会館前歩道拡張工事現場 ——— 10月28日

以上の工事現場は、舗装材や置土あるいは旧建物の基礎工事などですでに破壊が著しい。また、地層の保存状態が比較的良好でも古代の遺構、遺物などは発見されなかった。

例 言

◎ 本書は北海道大学(札幌団地)構内において、平成元年度に実施された各種施設土木工事と埋蔵文化財調査関連事業ならびに北海道大学埋蔵文化調査室で継続されている研究作業の年次報告である。

本編I-1～I-6で、構内で実施された立会による5地点の埋蔵文化財遺跡有無についての調査と、4地点の発掘調査の結果が報告されている。発掘調査の実施された4地点のうち教養部教養食堂増築予定地ならびに薬学部周辺整備工事予定地からは、それぞれ擦文時代の遺跡が発見された。残余の地点は破壊がはげしく、遺跡であった事が確認出来なかった。

附篇-1においては、北海道大学構内の古代遺跡分布調査の概要、附篇-2においては、1986年に報告された北海道大学構内サクシュコトニ川遺跡出土の炭化種子資料の検討で得られた最近の所見と問題点が

述べられている。この資料に立脚するかぎり、サクシュコトニ川遺跡を中心とするこの地域の擦文文化は、きわめて農耕文化の色彩が強い。

◎ この事業に関する一切の出土資料は、北海道大学埋蔵文化財調査室内に保管され、公開されている。

◎ 埋蔵文化財を出土する地点の調査については、北海道大学が調査主体となり、調査機関は北海道大学埋蔵文化財調査室、調査担当者には横山英介があたった。

◎ 年次報告作成は、本編(I-1～I-6および附篇-1)は横山英介が担当執筆し、附篇-2は吉崎昌一と椿坂恭代が担当作成したものである。なお、図版に使用した写真は、本編のものは横山英介が撮影したもの、附篇-2は椿坂恭代が撮影したものである。

I-2 法学部校舎増築予定地の予備調査について

- 遺跡名——K 39
- 所在地——北海道札幌市北区北 10 条西 6 丁目(北海道大学札幌団地) 北緯 43 度 04 分 東経 141 度 20 分
- 調査主体——北海道大学
- 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- 調査担当者——横山英介
- 調査期日——1989 年 6 月 27 日～7 月 5 日
- 調査面積——70 m²

《調査方法》

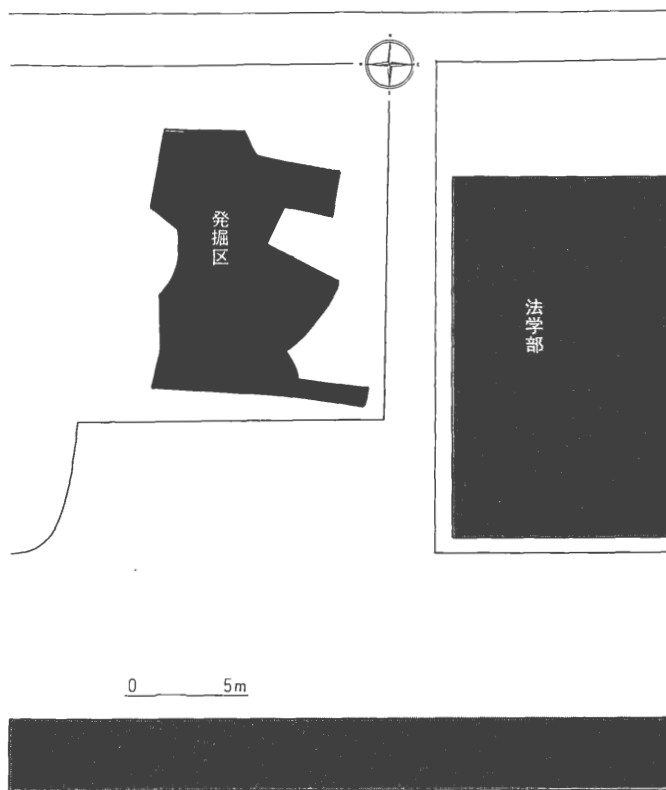
まず、重機を用いて積み土を排除(厚さ 60～80 cm),

自然堆積の黒色土上面から人手による精査を行った。黒色土は厚い部分(東側)で約 20 cm, 薄い部分(西側)で約 5 cm 堆積しており, 以下砂質粘土層にいたる。精査では, 黒色土をすべてと砂質粘土層を約 30 cm 掘り上げた。

《調査所見》

この地区からは古代の遺物・遺構は発見されなかった。したがって, 工事には支障ないものと判断される。ただし, 先にも見たようにこの一帯には古代の遺物包含層に当たる黒色土が比較的厚く堆積しているため, 今後この周辺の開発には十分注意が必要である。

第 2 図 法学部校舎増築予定地の予備調査



第3図 法学部校舎増築予定地の発掘状況



I-3 教養部教養食堂増築予定地の調査

- 遺跡名——K 39
- 所在地——北海道札幌市北区北 17 条西 7 丁目(北海道大学札幌団地) 北緯 43 度 04 分 東経 14 度 20 分
- 調査主体——北海道大学
- 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- 調査担当者——横山英介
- 調査期日——1989 年 7 月 10 日～7 月 25 日
- 調査面積——144 m²

《予備調査》

- (1) 重機を用いて積み土を排除(厚さ 40～60 cm)。
- (2) 調査区の南北方向に幅 1 m の試掘溝を設定し、西端から東端へ順に「1 トレンチ」、「2 トレンチ」と命名、全部で 12 本をまず人手で掘り下げた。
- (3) 人手による掘り下げ作業は、積み土下の攪乱層、その下の自然堆積の黒色土層を対象とし行った。その結果、調査 5 日目(7 月 13 日)にして「8 トレンチ」と「10 トレンチ」で黒色土下位から擦文時代の土器破片 2 点が出土し、この地点が古代の遺跡であることが判明したため本調査を実施することとした。

《本調査》

本調査では、遺物が出土した地区を中心に「3 トレンチ」-「4 トレンチ」間から「10 トレンチ」-「11 トレンチ」間を調査対象とした。

(1) 地層と遺物包含層

地層については、「1 トレンチ」、「5 トレンチ」、「11 トレンチ」の西壁面の観察による。この 3 本の試掘溝の地層状況には大きな違いは認められない。つまり、現地表面は厚さ 40～60 cm の積み土(①層)上にあり、その下には厚さ 30～40 cm の攪乱層(②上層)、以下厚い部分(東側)で約 20 cm、薄い部分(西側)で約 5 cm の黒色土層(②下層)、砂質粘土層(③層)にいたる。

このうち遺物包含層は、黒色土層(②下層)である。

(2) 出土遺物の種類・数量と分布状況

出土遺物の種類や数量などは表 1 に示す通りである。

分布は「6 トレンチ」、「7 トレンチ」-「8 トレンチ」間、「8 トレンチ」、「8 トレンチ」-「9 トレンチ」間、「9 トレンチ」-「10 トレンチ」間、「10 トレンチ」-「11 トレンチ」間であり、そのうち特に「8 トレンチ」-「9 トレンチ」間に多い(5 点)。このような遺物の分布状況からみると、遺跡の主体部は調査地点の南東へとひろが

っていると推定される。

なお、調査地点内には遺構は見られなかった。

(3) 遺跡の時代

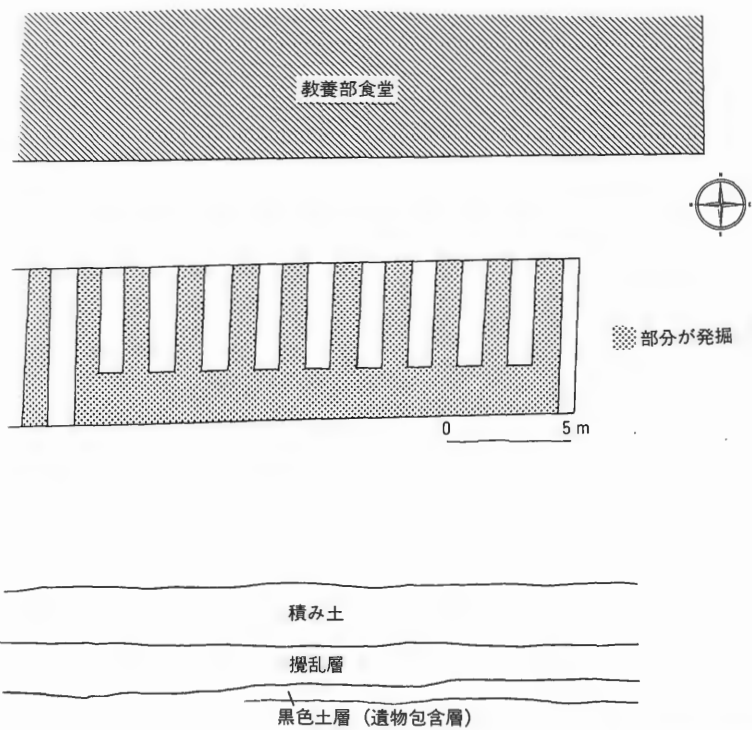
発見された遺物類から、この地区は擦文時代に営まれた遺跡であると判断される。

表 1 教養部教養食堂増築予定地の出土遺物

番号	遺物名	出土地点	層位	その他
1	土師器破片	10-11間	②下	
2	土師器破片	9-10間	②下	
3	土師器破片	8	②下	
4	土師器破片	8-9間	②下	
5	レキ	8-9間	②下	
6	レキ	8-9間	②下	
7	土師器破片	8-9間	②下	
8	土師器破片	8-9間	②下	
9	レキ	7-8間	②下	
10	レキ	6	②下	
11	土師器破片	9-10間	②下	
12	土師器破片	9-10間	②下	
13	レキ	9-10間	②下	
14	レキ	9-10間	②下	
15	土師器破片	10-11間	②下	
16	土師器破片	10-11間	②下	
17	レキ	8-9間	②下	
18	レキ	9-10間	②下	
19	レキ	10-11間	②下	
20	レキ	6-7間	②下	
21	土師器破片	10-11間	②下	
22	レキ	11-12間	②下	

(レキ→礫)

第4図 教養部教養食堂増築予定地の調査



I-4 医学部附属病院病棟等新営工事予定地の調査

- 遺跡名——K 39
- 所在地——北海道札幌市北区北 13 条西 5 丁目(北海道大学札幌団地) 北緯 43 度 04 分 東経 141 度 20 分
- 調査主体——北海道大学
- 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- 調査担当者——横山英介
- 調査期日——1989 年 8 月 21 日～9 月 8 日
- 調査面積——60 m²

《調査方法》

まず、重機を用いて積み土を排除(厚さ 130 cm)、自然

堆積の黒色土上面から人手による精査を行った。黒色土は厚い部分(西側)で約 20 cm、薄い部分(東側)で約 5 cm 堆積しており、以下砂質粘土層にいたる。

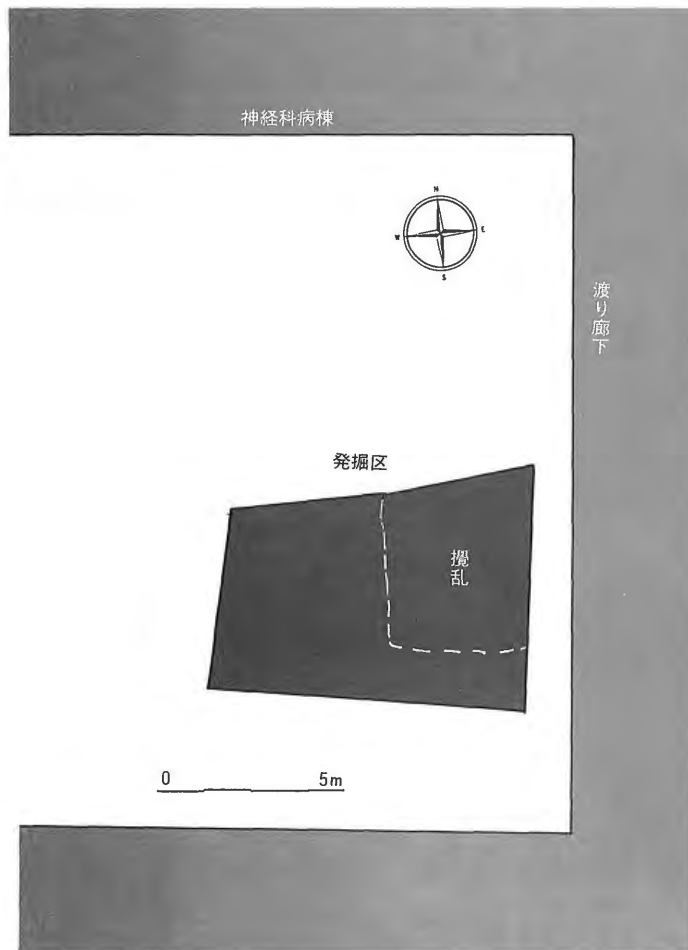
精査では、黒色土をすべてと砂質粘土層を約 60 cm 掘り下げた。

《調査結果と所見》

精査の結果、この地区からは古代の遺物・遺構は発見されなかった。したがって、工事には支障ないものと判断された。

なお、講義棟北側の現場は全面攪乱であった。

第 5 図 医学部附属病院棟等
新築工事予定地の調査



第6図 医学部付属病院病棟等新営工事予定地の調査状況



西から見る



東から見る



地山

I-5 札幌地区等情報ネットワーク設備工事予定地の調査

- 遺跡名——K 39
- 所在地——北海道札幌市北区北12条西6丁目(北海道大学札幌団地) 北緯43度04分 東経141度20分
- 調査主体——北海道大学
- 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- 調査担当者——横山英介
- 調査期日——1989年9月7日～9月29日
- 調査面積——48 m²

《調査方法》

まず、重機を用いて積み土を排除(厚さ40 cm)、自然堆積の黒色土上面から人手による精査を行った。黒色土

は厚い部分で約40 cm、平均20 cm 堆積しており、以下砂質粘土層にいたる。

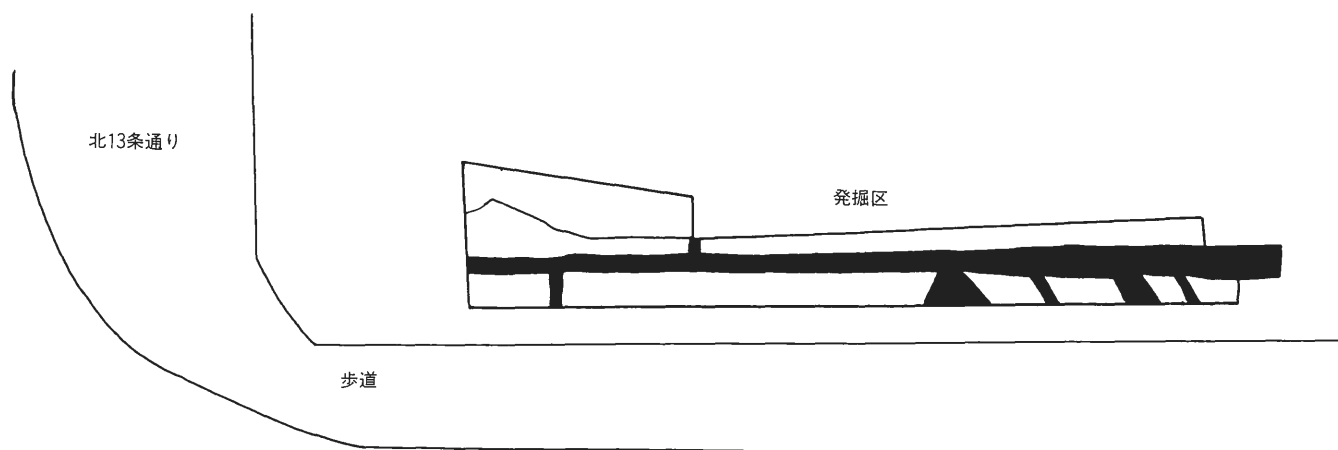
精査では、黒色土をすべてと砂質粘土層を60～90 cm 掘り下げた。

《調査結果と所見》

精査の結果、この地区からは古代の遺構は発見されなかった。しかし、調査区のもっとも北部分(北13条通りのやや南側)で黒色土上面などから土師器破片が29点出土した。

なお、同路線にある旧山下研究所前は攪乱が著しかった。

第7図 札幌地区等情報ネットワーク設備工事予定地の調査



0 12 m

第8図 札幌地区等情報ネットワーク設備工事予定地の調査状況



北から見る



西から見る



北から見る



南から見る

I-6 薬学部周辺整備工事予定地の調査

- 遺跡名——K 39
- 所在地——北海道札幌市北区北 12 条西 5 丁目(北海道大学札幌団地) 北緯 43 度 04 分 東経 141 度 20 分
- 調査主体——北海道大学
- 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- 調査担当者——横山英介
- 調査期日——1989 年 10 月 2 日～10 月 27 日
- 調査面積——80 m²

《調査》

ここは、1983 年度に薬学部受水槽建設に伴う代替地として発掘調査が行われた地点である。その際、擦文土器の破片や黒曜石製遺物が多量に出土し、かつ黒色土層のおち込みが確認されたため竪穴住居跡の存在が予想され埋め戻し保存した、といういきさつがあった。

今回の発掘調査の「2-1グリッド」がそこに当たる。「1-1グリッド」や薬学部の車庫の並びの地区は、旧医学部の基礎工事などですでに大きく地層が攪乱を受けており、発掘調査にたえられないような状況であった。したがって、今回は「2-1グリッド」が発掘調査の対象となった。

遺物包含層である黒色土層は、図-6の上段に示すように 20 cm 前後と比較的良好な堆積を示している。この土層からの出土遺物は次のようになる。

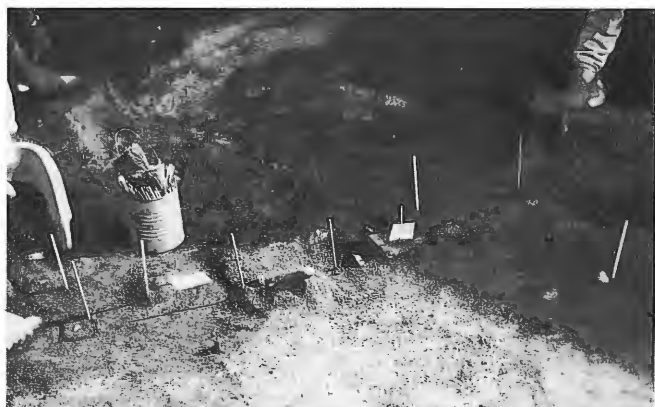
擦文時代の土器破片	178 点
鉄製品	9 点
石および破片	77 点
クルミ	12 点

《調査所見》

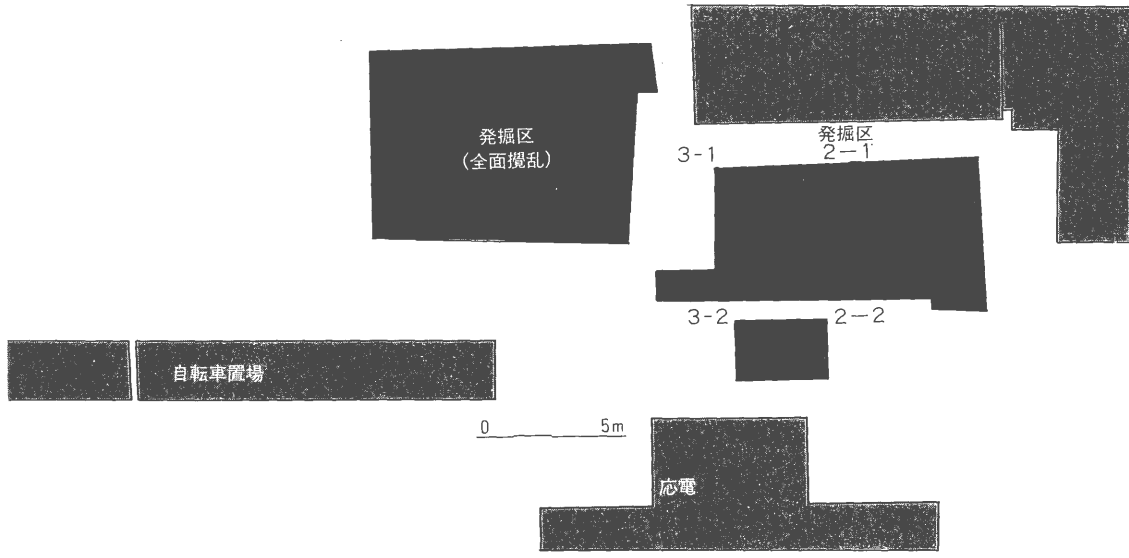
以前の発掘調査時に竪穴住居と予想した黒色土層のおち込みは、今回の調査の結果自然のおち込みであることが判明した。すなわち、幅約 160 cm で調査区をほぼ東西にわたって黒色土が大きくおち込んでいる部分が確認されたわけである。先に示した遺物の多くはここから出土したものである。

したがって、ここは集落からの廃品類を廃棄した場所である可能性が非常に強いと推定される。ただ、調査区は狭いうえに攪乱が著しく詳細は不明といわなければならない。

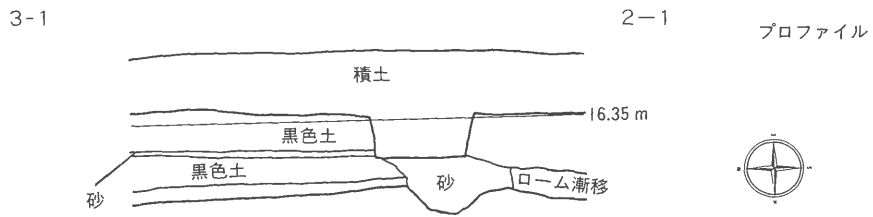
第9図 薬学部周辺整備工事予定地の調査



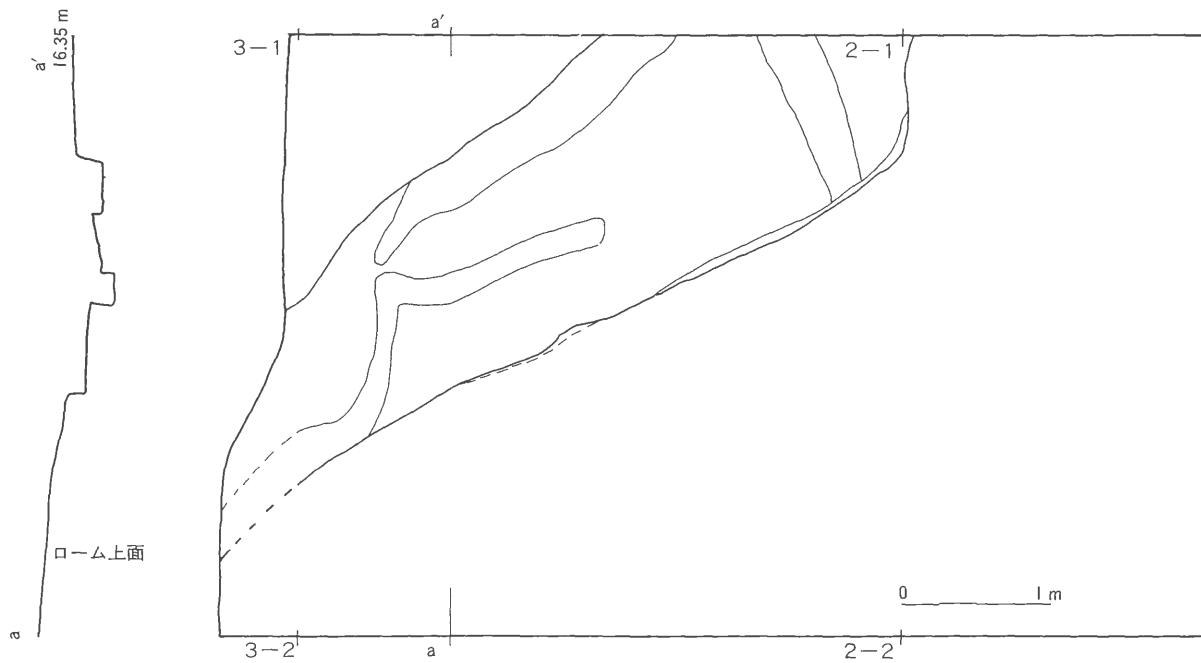
第10図 薬学部周辺整備予定地の調査



発掘区平面図

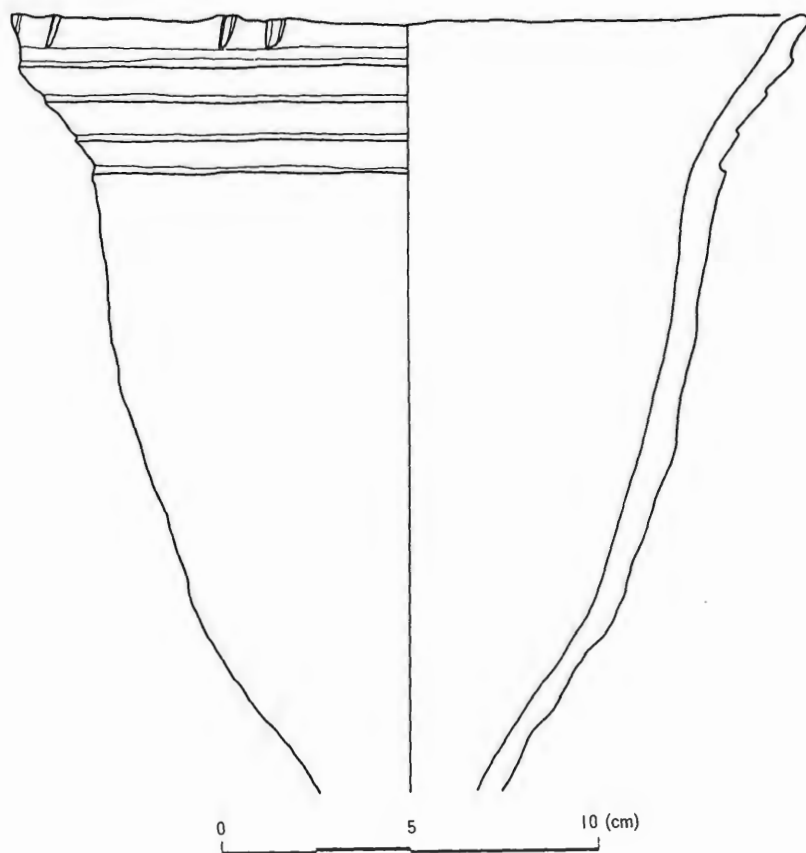


プロファイル

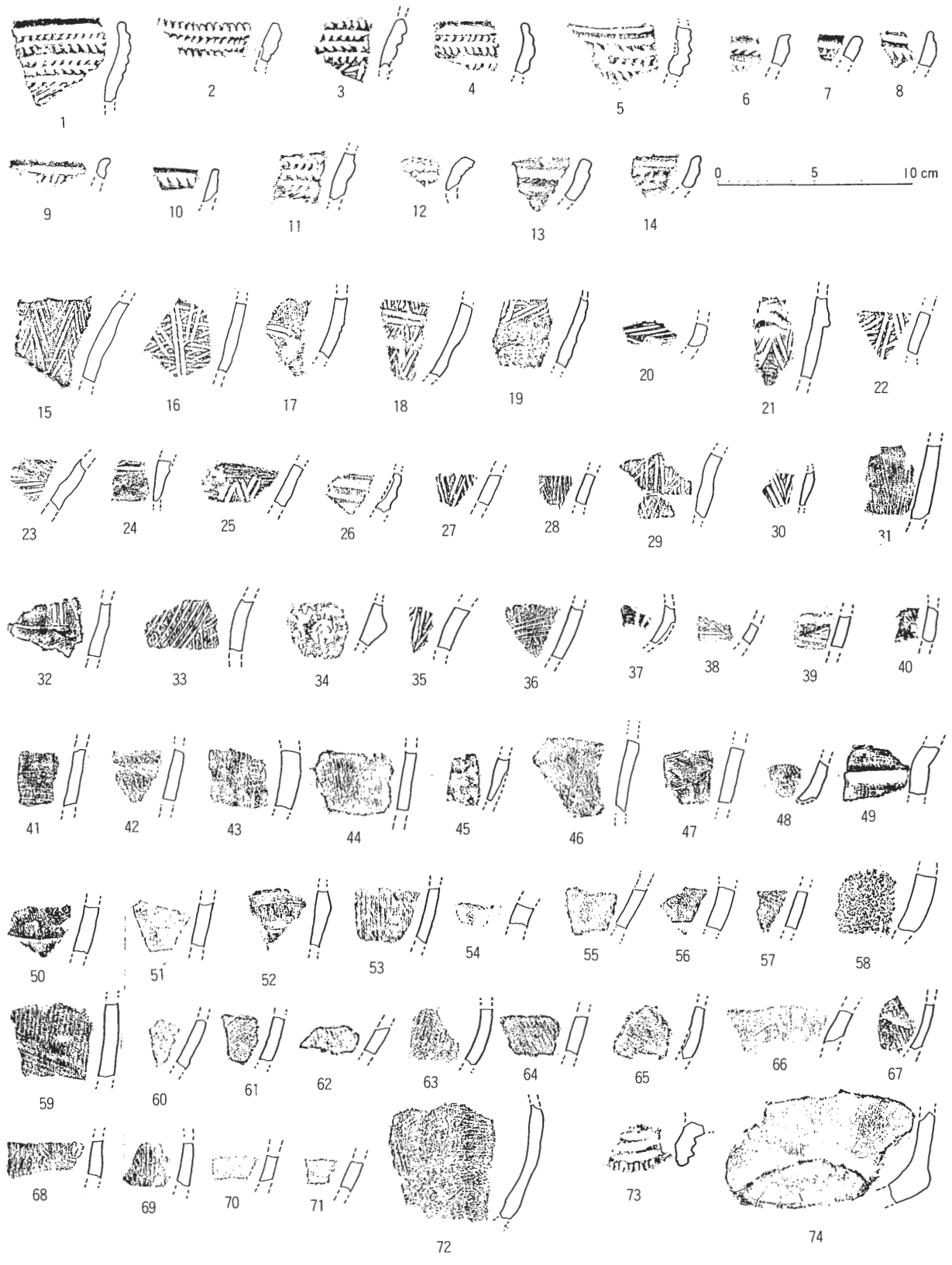


2-1 グリッド平面図

第11図 薬学部周辺整備工事出土土器



第12図 薬学部周辺整備予定地出土の土器拓影



1 報文の目的

北海道大学は北海道札幌市北区北8条西5丁目から北24条西15丁目に位置している(第I図)。構内には数多くの古代遺跡が見つかっている。

構内での古代遺跡等の各種調査活動は、これらを開発事業から保護する目的で発足したのであった。その後、1984年(昭和59年)にいたり、札幌市埋蔵文化財「K39遺跡(北大遺跡群)」として台帳に登録された(札幌市文化財調査報告書II 札幌市教育委員会 1984;札幌市埋蔵文化財台帳(付,分布図))。

北大構内において「構内におけるあらゆる土木工事に対して、事前にその地区の埋蔵文化財包蔵の有無・性格などを確認調査」し「破壊される可能性のある埋蔵文化財が認められるかどうかの予備的な調査」を踏まえて正式に発掘調査を実施した所は、20箇所におよんだ。これに、予備調査や一般分布調査の結果を加えれば、現在までに確認されている古代の遺跡はおよそ30数箇所におよぶ。

さて、ここでは過去10年間におよぶ構内の古代遺跡の調査を通じ、その分布上見られる特徴を簡単に示しておこうと思う。

後北C₂・D式期が最古

現在まで知られているもっとも古い遺跡は、教養部体育館(第9図1)で続縄文文化後半に営まれた狩猟・漁撈のための小規模な野営跡である。標高約14m代の低位面にあり、サクシュコトニ川へ流れ込んでいた小河川の右岸に位置していた。これと同じ型式の土器は、医学部附属病院パワーセンター用地内(同図2)、同中庭、サクシュコトニ川遺跡(新寮)第3文化層(同図3)などからわずかな資料が得られている。年代的には、西暦3~4世紀の頃である。

ついで、ポプラ並木東地区遺跡に代表される「北大I式」土器期。7基の墓からなる墓地が発見されている(第9図4)。これと同一型式の土器が農学部附属演習林(第19図5)から見つかっているが、正式調査は実施してい

ない。

擦文文化の集落が密集

構内でもっとも特徴的なのは、擦文文化の集落があげられるだろう。もっとも古いと思われるものが、国際交流会館の敷地内(第9図6)や、薬学部受水槽予定地内(第9図7)から見つかっている。いずれも、サクシュコトニ川の上流右岸において見つかっているが、下流側には未発見である。

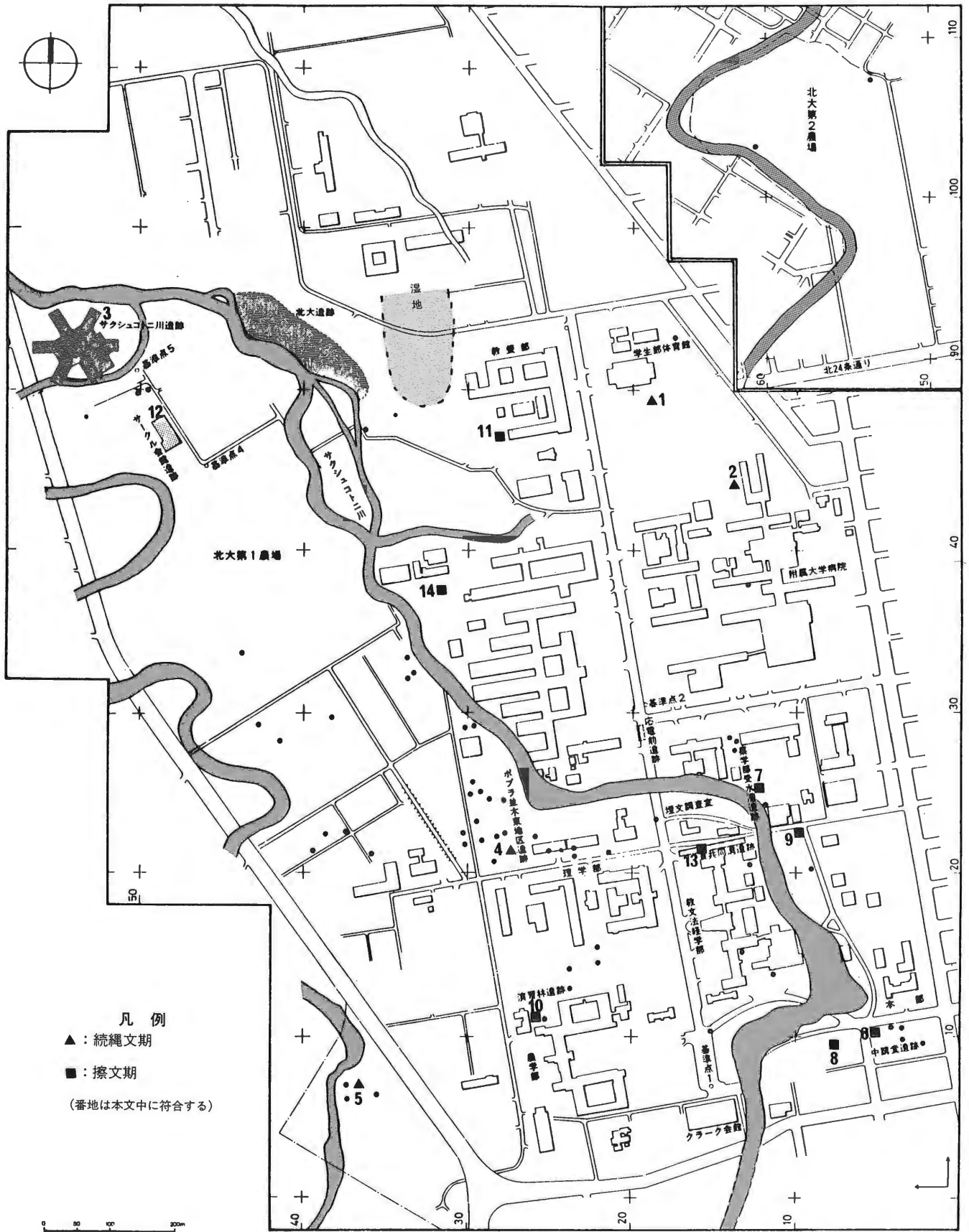
サクシュコトニ川の全流域には、擦文文化前期後半から中期にかけてのものがほぼ一様に分布するようになる。南から、職員厚生福利施設敷地内(第9図8)、情報教育センター西側地区(第9図9)、農学部附属演習林事務・研究棟敷地内(第9図10)、言語文化部敷地内(第9図11)、サークル会館敷地内(第9図12)などが前期後半の主なものである。中期のものとして、南からあげると教育学部北広場(第9図13)、工学部核磁気共鳴装置棟敷地内(第9図14)やサクシュコトニ川遺跡第1・第2文化層(第9図3)などである。

こうして見ると、続縄文文化の後半からヒトが構内に住み着いたということがわかるが、未だ集落を形成していた証拠はない。おそらく、地盤が未だ安定せず定住には不向きだったと推定され、わずかな高まりを利用し、小さな野営跡を残すにとどまっていた。しかし、現ポプラ並木の周辺は、それよりわずかに新しい頃、墓地が営まれる程に地盤が安定したのだろう。この附近には、この時期の集落が営まれたとしても不思議ではない。

擦文文化の段階になると、サクシュコトニ川沿いに多くの遺跡が営まれるようになる。その主体は集落であり、墓地などは未発見である。

いまのところ、全く古代遺跡が見られない地区は、教養部西側、旧恵迪寮跡地を中心とし、獣医学部へいたる地がそれである(アミ目)。そのほかの地区は、農学部第一農場をも含め、主に擦文文化の遺跡が数多く見られる、といえよう。

第I図 時期別遺跡分布



吉崎 昌一・椿坂 恭代

1 報文の目的

1986年度に報告された本学構内の擦文文化の集落址サクシュコトニ川遺跡は、良好な文化遺物包含層に伴って多数の自然遺物が発見され、この文化の分析のために欠かせない資料となっている(北海道大学1986)。基準になる人工遺物については、既に刊行された報告書の中で横山が詳細な分析を行っているが、20万点以上検出された植物性遺物については、その数量の多かったことや、我々の研究設備あるいは知識の不足していたこともあって、十分な分析にまでには至っていない⁽¹⁾。しかし、その後資料が蓄積され、他の遺跡との比較が可能になってきたので、研究面でも新しい展開が見られるようになった。また、最近では各地の発掘で同種の自然遺物が多量に検出されるようになり、これらとの比較も必要になってきている。その情報にも触れながら、作業の一端を報告しておきたいとおもう。同時に、前回の報告書の一部も簡略に紹介し、あわせて、その後北海道大学埋蔵文化財調査室のなかでの研究討論も加えておきたい。

2 遺跡の位置・調査主体の概要

サクシュコトニ川遺跡は、北海道札幌市北区北17条西17丁目3番地に位置し、北海道大学札幌団地内北部に広がっている。発掘調査は、北海道大学が計画した新学生寮(恵迪寮)の建設に先立って実施されたものである。

調査の主体は北海道大学、発掘と出土資料の整理ならびに研究は、北海道大学埋蔵文化財調査室が担当した。

発掘作業は1981年(昭和56年)8月14日に開始され、翌1982年(昭和57年)9月24日に終了、その間に5,904m²が調査されている。

3 遺跡の立地・層準・遺構

遺跡周辺は、土木工事や耕作などで原地形面がほとんど残されていない。しかし、この地域の記されている初期の地形図や、発掘時の所見ならびに航空写真から判読された植生の変化などを総合すると、現在の北海道大学構内の西部に痕跡的な流路の見られるセロンベツ川と、構内中央部を北西に縦断していたサクシュコトニ川があり、この両河川の合流点にはさまれた舌状に広がっている標高約11mの微高地上に、古代集落の形成されていたことがわかる。

遺跡周辺はきわめて湿潤である。そのため大学構内の土地としては、あまり活用度の高くなかった地域といえる。融雪の時期には長期にわたって水がたまり、水はけも劣悪であった。それ故、寮建設以前に準硬式野球場として利用されていた頃は、野球部の部員達はグラウンド整備のための排水に難渋していたという。

発掘区の地層は、地表を含めて肉眼でI層～VI層に大別され、各層はさらに砂や粘土の含有状況で細分されている。しかし、全層準ともシルト質の堆積で、その構成物質はほぼ同じである。第III層中には植物の炭化細片が混在し、土器片などが集中して出土する部分が検出された。これを第1文化層として扱ったが、遺構は焼土が1ヶ所検出されたただけで、他は確認することが出来なかった⁽²⁾。第IV層の上半部は無遺物の堆積となるが、その基底近くから第V層の上面にかけては多量の遺物と竪穴住居址5軒、土壇6基、ほかに集石遺構と土器片や炭化植物片が密集した廃棄スポット⁽³⁾などの遺構が検出され、第2文化層として扱われた。第VI層からは文化層として認識出来なかったが、続縄文時代の土器片3点が検出された。これを、一応、第3文化層として扱った⁽⁴⁾。つまり、サクシュコトニ川遺跡においては、それぞれ無遺物の地層を挟んで、上位にいわゆる擦文時代の文化層が2層、最下位に続縄文土器を二次的に含んだ地層が確認されたことになる。

これら全ての遺構や遺物類は、前にも述べたようにシルトやシルト質砂層の堆積によって覆われていた。おそらく、第1・第2文化層とも、ある時期には緩やかな流水下での堆積物が覆ったのであろう。とくに第2文化層の土器の中には、表面にリモナイトの凝集するものがあり、また、地点によっては高師小僧の出土がよく見られる。これらは、集落の置かれていた自然環境を物語っているであろう。しかし、洪水⁽⁵⁾が、ある日突然に集落を廃絶させたと言う根拠もない。なぜなら、出土した土器の殆どが廃棄状態または破片の集合という状況で検出され、使用時のままで発見されたものは、1号竪穴住居カマドの焚き口にセットされていた中型のカメとその下部の支脚用として転用された小型カメ、もう1例は1号土壇内に2個並んで倒立状態で発見された大型カメの2ヶ所のみであるからだ。急激な洪水の到来で集落が放棄されたのだとすれば、住居内に残されていた土器の量が

少なすぎる。

第2文化層の土器片の接合関係を利用した横山の詳細緻密な分析では、集落は当初1～4号の竪穴住居が営まれ、やがて3号住居が火災によって廃棄され、かわりに5号住居が追加建設される。しかる後に1, 2号が火災となって集落が廃絶したと結論している。しかし、これらの火災が最終原因となって集落廃絶が訪れたかどうかについては、筆者と横山の間に意見の一致を見ていない⁽⁶⁾。おそらく、この集落の廃絶に関しては、居住者の依存していた生業技術体系、さらに、琴似川水系に分布する他の擦文時代集落全体の詳細な検討の後に解答が得られるのではないかと⁽⁷⁾。

サクシュコトニ川遺跡に南接する埋没河川セロンベツ川の中に、もう一つ重要な遺構が発見されている。それはほぼ12mの川幅を横切って木杭を打ち込み、それに柳の小枝を絡めて構築されたテシ（フィッシュ・トラップ）である。これが、川を遡上するサケ科の魚を捕獲するのにきわめて重要な施設であり⁽⁸⁾、居住者の動物蛋白源の供給に不可欠であったことは確実であろう。だが、残念なことには、この遺構が第1, 第2のいずれの文化層に属していたのかは確認出来なかった。

4 年代・人工遺物

第1文化層、第2文化層の土器は、おおまかには横山らの言う擦文時代中期のそれぞれ前半と後半に位置づけられる（横山 1989）。したがって、その年代は第1文化層が西暦10世紀に、第2文化層のものは西暦9世紀後半と考えて良いであろう。第3文化層の続縄文文化の土器は、いわゆる後北C₂式土器に属するものである。同種の土器は、北大構内に隣接する札幌市K 441遺跡において東北地方の弥生時代末期に属する赤穴式土器類似の土器を複数個伴出しており（加藤・上野編 1987）、その関係からも西暦4世紀代のものとして考えてよい。

第1文化層からは、土師質カメ12個体分、須恵器大型カメ破片1個体が発掘された。第2文化層からは発掘とり上げ時の破片総数で6,767片、個体数にして313個分ある。うち土師器297個体、須恵器12個体、いわゆる赤焼土器4個体と分類されている。このほか土製支脚7個、土製羽口2点、土製紡錘車14点、土製玉17点、石器および石製品77点がこの層から出土している。

石器は、より古い続縄文文化に比べて量的に激減し、器種もすくない。この現象は、野鍛冶の存在を示す土製羽口の出土に象徴されるように、石器に代わる金属製品の普及と関係しているのであろう。

検出された石器を検討すると、集落内で生産された小

型剥片石器と⁽⁹⁾、集落外から何らかの理由で持ち込まれたものとがある。とくに、すり切り手法で製作された石斧（adze）は続縄文時代初頭のものと思われ、もう1例の石斧は、その製作技術から他地域のものが招来された可能性も考えられている⁽¹⁰⁾。

5 食料・生業

〔動物性食料の利用〕 発掘された動物遺体は、魚類が殆どを占め、その中でもサケ科に属するものがもっとも多い。これら動物遺体は、炭化植物片を採集するために計画されたフローテーションの残渣中から拾いだされたものである。つまり、炭化物や有機物の含有量の多い廃棄スポットの土壌とカマド周辺を含む焼土についてのフローテーション作業の過程で採集されたものである。したがって、こうした地点の微細な遺物は、かなりの精度で採集されたものとみてよい。

この動物遺体資料から検出されたサケ科の遊離歯総数は、6,036点、細片化している椎骨が10,092点確認されている。このうち、45点の遊離歯、89点の椎骨片は第1文化層から、残りが第2文化層から出土したものである（高橋理 1986）。この数字で判断する限り、サケはきわめて大量に捕獲されていた感じられる。それで、これらの数字が単年度の生産にかかわるものと仮定し、当時、どのくらいの量のサケが、ここで利用されていたのかを考えておきたい。

まず、比較的保存の良かった遊離歯を利用して個体数を推定することにしよう。検出されたサケ科の魚は、シロザケ *Oncorhynchus keta* として、まず間違いあるまい。通常、この魚は1尾当たり120本前後の歯を持っている。したがって、ここから採集された遊離歯数だけからいえば、単純計算で体長6～70cmのシロザケ50～80尾分に換算できることになる。しかし、遊離歯として遺存する可能性のある歯は、オスの方が圧倒的に多いから、これからはじき出される尾数は、メスの分を加えて若干補正し、およそ倍の数字つまり120尾前後になろうか。また、シロザケの椎骨数は、およそ62個が普通なので、前述の出土椎骨数がそのまま椎骨数そのものを意味するとすれば、140～160尾という数値が得られることになるだろう。この推定尾数は遊離歯から推定された尾数と良い整合性が認められる様に思う。ただ、実際の捕獲尾数は、土壌サンプルが採取できなかった部分に含まれていたものや腐敗分解で遺存していないもの、さらには河川への投棄されたものなどを考慮に入れなければならないから、このままでは大きく異なる可能性がある。それ故、居住者が捕獲していたシロザケ尾数については、出土資料から

計算される数値より、もっと高く見積る必要があろう。

一方、シロザケについて得られている生態学的な所見からすれば、河川で産卵に利用されていた産卵床の広さが資源量との関係で問題となる。いいかえれば、その水系のなかで利用可能な産卵床の広さからくる限界が存在し、それが遡上サケ資源量と関連性の高いことが知られているのである。このアプローチを利用するとどうなるだろうか。テシの発見された地点から上流域に広がるセロンベツ川水系の支流を含めてのおおまかな流路長は約 5 km、川底の面積は、発掘時の同川幅や航空写真から読み取れる状況から積算して、せいぜい 15000 m² から 20000 m² 程度の広さと考えて良いだろう。札幌市の豊平川サケ科学館の小宮山英重の調査によると、現在、豊平川には約 5 km の間に 1000 尾が産卵しているが、産卵床が重複した結果起きる掘り返しが多く、明らかに over population だと言う。豊平川は河川幅が 15 m、都市河川化が進んで水量も少なく、湧水部分が激減しているなどの悪条件が重なっているのだろうが、こうした数値を参考にしてセロンベツ川水域に遡上するサケ資源を還元すると、どんな好条件を想定しても 3000 尾を上回る事がない⁽¹¹⁾。在来のサケ資源を消失させずに漁獲生産量の維持を図るためには、漁獲量は遡上群の 60 % 以下であらねばならない。おそらく、こうした制約の中で考えられる漁獲量は 1000~2000 尾程度であったはずである。この数字は、出土遊離歯から計算された数値の 10 倍ないし 15 倍程度である。これは当時の捕獲技術あるいは生態的・理論的限界から考えても妥当な線であろう。もし、これらの大雑把な推定が真相に近いのなら、ここで捕獲されていたサケは多くても 2000 尾。それをサクシュコトニ川遺跡第 2 文化層の集落各戸に等分に分けていたのなら、1 戸あたり年間 500 尾、集落人口が 2~30 人だと考えれば 1 人あたり年間 50~100 尾前後というところだろうか。しかしながら、これは動物蛋白量としては十分に必要量を充足して余りある数値である。

テシ漁から得られたサケ蛋白量に関連するもう一つの資料に、サクシュコトニ川遺跡で発掘された陸上動物遺体の量の貧弱なことがあげられるかもしれない。この遺跡の動物遺体を担当した高橋理によれば、第 2 文化層からは鳥骨が 1 点、哺乳類の遺体としてウサギが中節骨 2 点、シカ中節骨および末節骨がそれぞれ 1 点ずつ、それに食料としたかどうかは別として若干のネズミ骨が検出されたただけであった。高橋も指摘しているように、確かに哺乳動物の遺体はきわめて少ない(高橋理 1986)。しかし、シロザケの捕獲量推定が前述の数値に近いものだったとすれば、ここに居住していた古代人は、それほど

積極的に他の種類の動物蛋白の確保にあたらなくとも良かったと考えられるのではないだろうか。

[植物性食料の利用] サクシュコトニ川遺跡第 2 文化層から発見されたもう一つの重要な遺物として、炭化した植物種子やムギ類の穂軸があげられる。種子は栽培種のほかにも雑草や液果・堅果などが相当数含まれていた(Crawford 1986)。これらは、全てフローテーション作業で採集されたものばかりである。採集された炭化植物の選別はまだ継続中で、現在、カナダのトロント大学人類学部の G. Crawford の研究室と北海道大学埋蔵文化財調査室とで、手分けして作業が進められている。これまでに処理された種子類は、およそ 15 万粒ほどであるが、最終的には 23 万粒をこす種子が分類されるものとみられている。

検出された植物種子のうち、同定可能なものは 32 種類におよぶ。しかも、そのうち 10 種類あるいは 11 種類は、栽培種であった。また、7 種類は人間活動に密接に関連する雑草として扱われるものである。たとえば、タデ属 *Polygonum*、ギシギシ属 *Rumex*、アカザ属 *Chenopodium*、イヌビエ *Echinochloa crusgalli*、ホオズキ *Physalis* sp、イヌホオズキ *Solanum nigrum* などがこの範ちゅうにはいるだろう。そのほかにも食用可能な野草や野生果実が出土している。

◇キビとアワ◇ 栽培植物としてもっとも出土量の多かったものは、キビ *Panicum miliaceum* (I 図 2a~b) とアワ *Setaria italica* (I 図 1a~b) である。まだ、出土資料全てが調べられたわけではないが、現在までにチェックされたおおよその個数は、キビが 50000 粒以上、アワは 80000 粒以上である。キビとアワはその大きさが異なるだけでなく、胚の形態が明らかに異なっているので、資料が豊富な場合には同定上の問題はない。また、穎が残存している場合には、走査電顕 (SEM) で長細胞の形態が観察でき、同定の精度を飛躍的に高めることが出来る。

アワと雑草のエノコログサ *Setaria viridis* についても、形態上の差、とくに穎果の幅と厚さが両者では異なり、同定上にさほどの困難はない。例えば、サクシュコトニ川遺跡から出土したアワの穎果の大きさは、長さ 1.4 mm、幅 1.2 mm、厚さ 1.0 mm 前後であるが、札幌市教育委員会の調査した K 135 遺跡 4 丁目地点で検出されたエノコログサの穎果は、長さ 1.3 mm、幅 0.8 mm、厚さ 0.6 mm が平均であった(吉崎 1990)。ちなみに、現生エノコログサは、未炭化内外穎つきのもので、それぞれ長さ 1.8 mm、幅 1.0 mm、厚さ 0.6 mm 程度、穎果は長さ 1.4 mm、幅

0.9 mm, 厚さ 0.5 mm ほどである。炭化あるいは未炭化, 内外穎付きのものを含むので, 正確な比較は出来ないが, 傾向は理解出来るだろう。

◇ヒエ?◇ アワと並んで雑穀の中で重要な位置を占めるものにヒエがある。我々もこの遺跡の植物種子研究の当初から, ヒエの検出に努力を払ってきた。だが, 栽培ヒエ *Echinochloa utilis* については, いまだに問題が残されたままである。Crowford は, 1986 年度の報告中のなかで, ここから出土したアワ・キビの中にヒエが混在しているかもしれないと指摘している (Crowford 1986)。しかし, その後の作業では, 現在栽培されているような確実な「栽培ヒエ」と全く同じ形態のものは, いまだに検出されていない。いまのところ, この時期とは関係のない縄文時代の前期から後期にかけての栽培種とみなしてよさそうなヒエ (小笠原 1986) と, 余市町教育委員会が調査中の大川遺跡—歴史時代の例 (未報告) が確認されているだけである。奇妙なことであるが, ヒエに関する限り, 擦文文化に属する他のどの遺跡においてもサクシュコトニ川遺跡同様の事情であるらしい。この点に関しては, 我々の共同研究者でもある G. Crawford の研究室での観察結果も同様であるという。ヒエを遺伝学的に調査した藪野友三郎によれば, 日本の栽培ヒエの祖先種は, 東アジアのイヌビエ *Echinochloa crusgalli* であることが判明しているという (藪野 1981)。また, 北海道においては, アイヌ民族の保持していた雑穀農耕や伝説の中にもヒエが存在しているので (林 1969), そのルーツは古くまでさかのぼるとみた方がよい。一方, 佐々木高明をはじめとする民族学者の見解によると, 日本列島のヒエは, 稲作農耕の伝来以前に渡来し, 各地の焼畑雑穀の中で重要な位置を占めていると考えられると言うのである (佐々木 1971)。このように, 複数の研究領域のデータからヒエが古い雑穀であることが予測されているにもかかわらず, 発掘資料によるかぎり, 擦文時代の栽培ヒエの実態はまだ不明確である。

第II図 10, 11a~b にはサクシュコトニ川遺跡出土のヒエまたはイヌビエと見られる標本の走査電顕 (SEM) 像, 第II図 12a~b は, 札幌市K 441 遺跡北 34 条地点で出土した西暦 10 世紀代のヒエと思われるもの。同 13a~c が現生のイヌビエ, 同 14a~c が現生のタイヌビエである。同 15a~c は現生の栽培ヒエ。これらを比較してみると, サクシュコトニ川遺跡出土の種子はイヌビエに類似することがよくわかる。また, 幅ならびに側面の形態が, 現生のイヌビエと栽培ヒエでは膨らみが違い, 判別出来る。

かつて, 筆者の一人吉崎は, 擦文時代遺跡出土のヒエあるいはイヌビエについて, 炭化種子の形態的変異のみで栽培のものであるか非栽培のものであるかを決定することには無理があると考え, むしろ, 人間の利用状況を考古学的に確定することが, 判断のてがかりになるのではないかと述べたことがある (吉崎 1989)。だが, こうしたアプローチが成功している訳ではない。したがって, これらの問題が解決するまで, 擦文時代の遺跡から出土するこの類の種子に「擦文ヒエ」の名称を仮に与え, 将来の研究課題としておきたい。

参考までに, 北海道各地出土の擦文時代主要遺跡から検出されたアワ・キビ・擦文ヒエの計測値を 表に示しておく。

◇オオムギとコムギ◇ サクシュコトニ川遺跡から出土した植物種子で, 前述の雑穀類に次いで多いのはオオムギ *Hordeum vulgare* とコムギ *Triticum aestivum* である。現在までに調べられた個数は, オオムギがおよそ 20000 粒ほど, コムギがおよそ 6000 粒ほどである。オオムギとコムギは炭化した穎果だけではなく, 穂軸も多量に検出されている (III図 18, 19)。今迄のところ, 日本列島内の諸遺跡からこのようなムギの穂軸の出土が報告されたことはないように思う。だが, 今後出土炭化物の精査が進めば, 各地の遺跡から大量に検出されるものと予想される。

穂軸は, 発掘区全域にわたる検出作業が終了していないため, 最終出土個数などについては不明である。だが, 炭化物 16 と名付けられた廃棄スポットからは 1500 個, 同 19 から 6 個, 炭化マウンド—大型の廃棄スポットと考えられる—から 48 個検出されている。チェックの終了した区域の状況からすれば, 穂軸の出土分布には明らかな偏りがあり, この集落の屋外で実施されていた脱穀作業の様相を窺い知ることが出来よう (椿坂 1989)。

検出されているオオムギは 6 条オオムギで, 北ヨーロッパに普通に見られるタイプにちかい。オオムギは渡島管内松前町札前遺跡 (山田・椿坂 1989) のほか, 本州にも東京都早瀬前遺跡から好例が知られている (南木 1988)。また, 青森県南津軽郡杉の沢遺跡第 1 区において 10 世紀とみられる 4 号土師竪穴住居から約 200 粒出土し, 原報告ではコムギと記載されている資料も, 写真で判断する限り同種のもと思われる (奈良岡 1979)。第III図 16a, b にサクシュコトニ川遺跡出土のオオムギ, 同 20 a, b は札前遺跡出土の西暦 11 世紀のオオムギ, 同 22a, b は十勝太若月遺跡の 11 世紀末と考えられる焼失住居から大量に検出された若干形態の異なるオオムギの例をあげておく。これらの資料は全て擦文文化に所属する住居から

発掘されたものだが、これ以外に網走市二ツ岩遺跡で8世紀後半のオホーツク文化に共伴したもの(第Ⅲ図 23a, b)を加えておこう。

◇ Crawford からも指摘しているように、この遺跡から出土したコムギ(第Ⅲ図 17a, b)はきわめて小型である。第表にその計測値を示しておくが、これほど小型のコムギ(コンパクト・コムギ)は世界でもあまり知られていないらしい。それで、発掘当初から我々の間ではこのコムギに対してエゾコムギという仮称が与えられていた。しかし、発掘で検出されているのは、全て穎果と穂軸のみで、低湿地遺跡にしばしば見られるような保存の良好な穂そのものなどが出土しておらず、分類上の細かな帰属などはにわかには決定出来ない。しかし、他の考古学的資料と大きさを比較すれば、第Ⅰ表に示すような位置におちつくのではなからうか(Crawford and Yoshizaki 1987)。北海道以外の地でもこの種のコムギの出土が見られる。平安時代に属する京都市西大路七条井戸から検出されたコムギ(岡田 1985: 72, 図版 27)は Crawford によってコンパクトタイプであることが確認されているし(Crawford and Yoshizaki 1987: 212)、西暦9~10世紀とされる東京都板橋区早瀬前遺跡からも同種のものが検出されている(南木 1988)。また、直良信夫が朝鮮半島の西暦8~9世紀代として報告した扶余の炭化コムギは、計測値の平均が4.1 mm, 2.2 mm, 1.8 mm(直良 1956)でこれに類似する。しかし、これらの小型コムギが、すべて同一の種として同定し得るのかどうか、さらに、これらが分類学上のいわゆる *Triticum aestivum* ssp. *compactum* などのコンパクトタイプ・コムギとどのような関係にあるのかは、まだ若干問題が残っていて結論が得られていない。北海道内でサクシュコトニ川遺跡出土の小型コムギと同種と思われるコムギは、札前遺跡からも検出されている(第Ⅲ図 21a, b)。この遺跡で出土したコムギも、小型のものばかりであった(山田・椿坂 1989 a)。ただし、1989年度までの我々の調査では、北海道におけるこの種の小型コムギの出土例は、それほど多くはない。これまで述べてきたサクシュコトニ川遺跡とここに紹介した札前遺跡の2か所からしか知られていない。

◇ 擦文オオムギ? ◇ 出土オオムギとコムギについて擦文時代の諸遺跡資料を追跡中に、もう一種類異った形態を持つオオムギに気付いた。面白い事に、オオムギの資料数が豊富なサクシュコトニ川遺跡からは、同形態のものが見つからない。通常のオオムギに比較して長さの点

で寸ずまりの傾向を見せるグループで、当初、加熱による発泡が原因で変形した可能性を無視出来ないと考えていた為、資料の同定に際してオオムギかコムギかの判断に混乱が生じていた。例えば、札幌市K 441 北 34 条地点遺跡(吉崎 1988 a, 1989 b)ではコムギ?、網走市二ツ岩遺跡においてはオオムギ?(山田・椿坂 1989 b)として扱っている。しかし、顕微鏡下で詳細な観察を続けた結果、このグループの種子の形態は、発泡変形の結果生じたものではなく、サクシュコトニ川遺跡で大量に出土したオオムギとは異なるのではないかと考えられるに至っている。1989年末になって、十勝管内十勝太若月遺跡の擦文時代後期の竪穴住居中から土器に入ったまま出土した大量のオオムギ(後藤 1974)資料の観察をすることが出来た¹²⁾。このオオムギは、当初、粉川昭平によって同定されたものであり、その出土状況の良好さから関係者に注目されていた。実物資料について形態の観察や計測を行った結果、このオオムギは、その形態、大きさともに我々が問題としているオオムギに属させて良いと判断された。その計測値を第表にあげておく。同種資料の増加が考えられるので、今後の作業上の混同を避けるために、この類のものを、とりあえず「擦文オオムギ」と仮称しておこうと思う。

本州においても、この種のオオムギが分布している可能性が高い。例えば、千葉県有吉北貝塚で発見された8世紀初頭のSB-163住居址埋め土から、23粒のオオムギ(原文では *Hordeum* sp. オオムギ属)が検出されているが(小高 1988)、写真によるかぎり問題のオオムギに類似している。

小型コムギの説明に関連して若干述べたが、北海道でサクシュコトニ川遺跡出土したものと同様なタイプの組み合わせ—オオムギと小型コムギをセットで出土する遺跡からは、ここに述べた「擦文オオムギ」が検出されていない。それに比べて、このセットは、本州では一般的に見られるらしい(たとえば南木 1988)。

我々の手元には西日本の弥生~平安時代に関する詳しい資料に乏しく、いまのところ、これ以上の分析は出来ない。しかし、現生のオオムギの研究からすれば、東日本にW型の、西日本にはE型のオオムギが分布を異にして広がっているのである(高橋 1951)。日本列島内においては、在来種の野菜の中にも、こうした分布圏に類した広がり見せるものがあり、これが渡来ルートの違いを暗示するかもしれないとしばしば指摘されている(青葉 1981)。こうした現象が、いつ、どのような背景で始まっ

たのか考古学的に証明出来るかどうかは別にして、注目しておかなくてはなるまい。その見地からすれば、網走市二ツ岩遺跡で、擦文土器が伴出するとはいえ、オホーツク文化の住居から擦文オオムギの出土している事が目をひく(山田・椿坂 1989 b)。なぜなら、この時期の沿海州には、すでにブタを飼育し、雑穀などを栽培していた文化が広く存在していたと考えられているからである(例えば加藤 1988) (13)。

◇コメ *Oryza sativa japonicum* は 19 粒出土している。計測に耐えうる標本では、長さ 4.1 mm、幅 2.6 mm で、あきらかに短粒種である(IV 図 24)。全て脱穀された状態で炭化して出土しており、籾の状態のものは検出できなかった。検出数が少ないのと、こうした発見時の状態からみて、この遺跡周辺に水田が存在していた可能性は、きわめて少ない。もし、何らかの形で水田を維持しようとしても、水温の点でも問題が残る。なぜなら、かつてサクシュコトニ川遺跡の周辺を流れていた河川は、全て豊平扇状地に湧出していた泉(メムと呼ばれる)が水源となっていた。その冷涼な水環境がサケ科魚類の天国を形成していたわけである。したがって、このような自然環境は、必ずしも水稲耕作に好適な状況ではなかった。いいかえれば、水田によるコメ栽培が可能になるためには、広範囲かつ大規模に森林が破壊されて裸地が増加し、その結果として作今の様に地表水の水温が上昇しなければならなかった。こうした自然破壊が、当時の住民が行っていた畑作の規模から推定して起こり得る可能性はほとんどないし、この周辺の諸遺跡から得られている花粉分析、あるいは炭化植物片の含有量の変化などの地学的な支持材料も絶無なのである。

サクシュコトニ川遺跡で発見されたものと同様の炭化米は、渡島管内松前町の札前遺跡から破損資料を含めて 5 粒検出されているが、ここでも周囲に水田造成の可能情のある地形環境は観察されない。地形のみならず、そばを流れている水河川は、現在でも降海性イワナが棲息する状況で、水田造成のための水源としては不向きなのである。したがって、もし両遺跡のコメが現地の生産に係わるものだとすれば、水稲ではなく陸稲であった可能性を検討した方が良い。こうした状況から判断すれば、コメは、より南西の地域からか、あるいは東北地方日本海沿岸地域から、土師器や鉄製品などと共にこの地に持ち込まれた可能性が大きいだろう。

◇その他の栽培植物◇ サクシュコトニ川遺跡からは、以上述べてきた栽培植物以外に、アサ *Cannabis sativum*

(IV 図 27)、アズキ *Vigna angularis* とと思われるもの(IV 図 25)、シソ属 *PERILLA* Linn. (IV 図 28a~b)、ウリ科 *CUCURBITACEAE* (IV 図 26)、アブラナ属 *Brassica* L. (IV 図 29a~b) などがあげられる。この中で量的に多いものは、アサ 170 粒でそれにアズキと思われるものが続き、少量のシソ属がある。ウリは 2 例検出されただけで、詳細は不明である。アブラナ属の種子は、現在のところ 8 個が炭化物マウンド(大型廃棄スポットあるいは幣場か?) から検出されている。重要な植物なので、現生種を含めて調査中であるが、まだ実態はわからない。もし、これが青葉高に指摘するような洋種系のカブ(青葉 1981)ということにでもなれば、前述したような東日本に偏りを見せて分布する W 型のオオムギの流入経路や渡来時期とからんで、考古学的な大問題となる可能性をはらんでいるとあって良い。現状では、恵庭市中島松 5 遺跡 B 地点報告でも述べたように(吉崎 1990)、北海道の栽培植物渡来時期やその流入路については、予想外に複雑であったと考えておく方が良いかもしれない。

6 サクシュコトニ川遺跡に見られる食料獲得戦略

以上述べてきた様に、サクシュコトニ川遺跡に居住していた擦文時代の古代人は、十分な動物蛋白を主として河川を遡上してくるサケ科の魚類を中心として充当し、しかも、広範な農耕活動を行っていたものと解釈せざるをえないだろう。まだ、彼らの保有していた耕作地の痕跡は発見されていないが、サクシュコトニ川遺跡の調査に端を発した種子分析のアプローチで詳細に調べ始められた各地の出土雑穀類や雑草資料から得られているデータを基礎とする限り、小規模な菜園農耕や焼畑しか持たなかったと結論する事は、きわめて困難なのである。

また、擦文文化人の狩猟漁撈行動を説明するのにしばしば引用される遺跡として、桧山管内奥尻島青苗貝塚(佐藤 1979)、後志管内神恵内観音洞窟(石附・石川編 1984)などがあげられる。これらは大型哺乳類を始めとする多量の動物遺体を出土する遺跡として著名であるが、ともに離島あるいは海蝕洞窟といった特別な立地条件下にある。したがって、ここで得られている生業のパターンが普遍的であるという証拠は何もない。むしろ、こうした特別の遺跡を除き、擦文文化の集落からは、それ以前あるいはそれ以後の時期にみられるような明確な形の貝塚の類がほとんどみられない点に注目すべきであろう。通常の発掘で検出される動物遺体は細片化した魚骨が中心であり、どの遺跡においても哺乳動物資料は痕跡的できえある。こうした事情からすれば、大型動物骨は集落から離れた特別の地点に儀礼的に埋納された可能性さえ読

み取れるかもしれない。しかし、これまでも繰り返して述べている様に、陸上動物の日常生活の中で占める食料としての重要度は、発掘資料を基礎とするかぎり、期待されているほどには高くないと判断されるのではないだろうか。他方では植物性食料に関する資料の増加には著しいものがある。例えば、十勝管内浦幌町十勝太若月遺跡で発掘された擦文文化後期の焼失住居からは、カマドの前から多量のオオムギを入れたままの鉢形完形土器が、中央の炉近くの板の上にはシソが山盛りになっており、そのうえ床面広くキビが散乱して検出された(後藤 1974)。こうした事例は、サクシュコトニ川遺跡資料の分析を通して得られている栽培植物に依存度の高い擦文文化人の生活復元を強く支持するものといえよう。

サクシュコトニ川遺跡から推定復元されるような生活形態がこの時期に普通のものだとすれば、海蝕洞窟や、離島などにみられる漁猟民的集落とは異なった生活が内陸部では広がっており、それらが互いに密にネットされていた可能性が考えられる。こうしたシステムの中にこそ、この時期の文化の実態があったのではないだろうか。つまり、北海道の大部分の地域の擦文文化は、佐々木高明の分類(佐々木 1988)に従えば、あきらかに『初期的農耕』を持つ文化に定義づけられるだろうし、さらに、地域によっては、稲作の欠落した雑穀農耕文化とさえいえる可能性があると考えたい⁽¹⁴⁾。

(この報文を作成するためにあたって基本構想ならびに執筆は吉崎が、走査型電子顕微鏡による撮影同定は椿坂が主として担当したことをつけ加えておきたい。)

謝辞

この報文を作成するにあたって、次の人々のお世話になった。感謝の意を表しておきたい。

北海道大学辻井達一氏、同伊藤浩司氏、同深沢和三氏、同大谷諄氏、同平川泰彦氏、神戸通流科学大学南木陸彦氏、南茅部町教育委員会小笠原忠久氏、同阿部千春氏、北海道開拓記念館山田悟郎氏、浦幌町教育委員会後藤秀彦氏、札幌市教育委員会加藤邦雄氏、同上野秀一氏、石狩町教育委員会石橋孝男氏、恵庭町教育委員会上屋真一氏、同松谷純一氏、余市町教育委員会ならびに大川遺跡調査団宮宏明氏、芦別市教育委員長谷川隆博氏、小樽市教育委員会、千歳市教育委員会、江別市教育委員会、青森県教育委員会、財団法人北海道埋蔵文化財センター、樫原考古学研究所寺沢薫氏、札幌市豊平川さけ科学館、水産庁北海道サケマスふ化場、清水システム研究所清水雅男氏、トロント大学人類学部 Gary Crawford 氏。

注

- 1: 雑草種子、アブラナ属などについては、まだ開始したばかりである。
- 2: 発掘区の北西側、現在の寮に北接して第1文化層の時期に相当する遺物、遺構が存在している。
- 3: 原報告では炭化物、炭化マウンドなどの表現で記載。
- 4: 2次堆積で、本来は文化層として扱えない。
- 5: この流域の遺跡は、どこでもこの種の堆積が観察される。
- 6: 正確には、横山は「廃絶した」と述べているだけで、その原因についてはふれていない。
- 7: 耕作地やサケ産卵床が破壊された可能性もある。
- 8: 枝川に設置されており、この時期にはこれより上流には集落がなかった可能性がある。本流域そのものより支流との合流点、あるいは支流とその枝川との合流点などに小集落が立地している事が多い。こうした集落立地条件については、以前(吉崎 1984)にふれた事がある。
- 9: ここはほぼ純粋に擦文時代の遺跡なので、混入の恐れはない。
- 10: オホーツク文化のものである可能性もある。この時期の石器の中には、その場所の住民によって製作されたもの、どこかで採集され利用されたもの、時期的に並行する他の集団から持ち込まれたものなどがある。採集して利用するケースは、明治期まで知られている。とくに国後島では、獲物の皮剥に利用していた。金属ナイフより効率が良かったと言う。
- 11: 人口ふ化放流の場合は異なる。また、この見積りは最大級の数値であり、実際は1500~2000尾でいどが実情であったろう。
- 12: 浦幌町教育委員会の後藤秀彦氏、道立開拓記念館山田悟郎氏の好意によって可能になった。
- 13: オホーツク文化にもブタ飼育が認められる。沿海州の古代文化については、明確な資料の出土遺跡、文化層、植物の学名などにつき再検討の必要を感じている。
- 14: 東北地方の一部もこの圏内に入る可能性があるのではないか。

引用文献

青葉高

1981: 『野菜—在来品種の系譜』法政大学出版社

石附喜三男・石川直章編

1984: 『神恵内観音洞窟』神恵内村教育委員会

小笠原忠久

1989: 『南茅部町で検出された縄文期のアワ、ヒエ』Project Seeds News No. 1, Project Seeds札幌

加藤邦雄・上野秀一編

1987: 『K135遺跡』札幌市文化財調査報告書XXX札幌市教育委員会

加藤晋平

1988: 「シベリアの先史農耕と日本への影響」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』所収 日本放送出版協会

小高春雄

1988: 「東南部地区における古代農業資料」千葉県文化財センター—研究連絡誌 第23号

後藤秀彦

1974: 『十勝太若月—第二次発掘調査』浦幌町教育委員会
佐々木高明

1971: 『稲作以前』日本放送出版協会

1988: 「日本における畑作農耕の成立をめぐる」『畑作文化の誕生』所収 日本放送出版協会

- 佐藤忠雄編
1979：『奥尻島青苗遺跡 図版編』函館土木現業所
奥尻町教育委員会
- 高橋 理
1986：『動物遺存体』『サクシュコトニ川遺跡 I, II』所収 北海道大学埋蔵文化財調査室
- 高橋隆平
1951：『大麦品種の分類と地理的分布に関する研究第15報』農学研究 39
- 椿塚恭代
1989：『サクシュコトニ川出土植物遺存体の再検討』北大構内の遺跡 7 北海道大学
- 直良信夫
1956：『日本古代農業発達史』さえら書房 東京
- 奈良岡洋一
1978：『植物性遺物の同定』『杉の沢遺跡』所収
青森県教育委員会
- 北海道大学
1986：『サクシュコトニ川遺跡 I, II』北海道大学埋蔵文化財調査室
- 南木睦彦
1988：『東京都板橋区早瀬前遺跡から産出した大型植物遺体』早瀬前遺跡調査報告書所収
- 矢野牧夫
1985：『出土した植物遺体について』『札幌』前収 松前町教育委員会
- 山田悟郎・椿塚恭代
1989a：『札幌遺跡から産出した栽培植物について』『札幌 II』所収 北海道松前町教育委員会
1989b：『オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀』Project Seeds News No.1 Project Seeds札幌
- 藪野友三郎
1981：『ヒエ属植物の分類と地理的分布』種生物学研究 V 東京
- 横山英介
1989：『北大構内遺跡の土器群変遷と推定される年代観』北大構内の遺跡 7 北海道大学
- 吉崎昌一
1989a：『K441遺跡北34条地点出土の植物種子』札幌市文化財調査報告書 XXXVII 札幌市教育委員会
1989b：『K441遺跡北33条地点出土の植物種子』札幌市文化財調査報告書 XXXVI 札幌市教育委員会
1990a：『K135遺跡4丁目地点から出土した植物遺体』『K135遺跡4丁目地点』札幌市文化財調査報告書 札幌市教育委員会 in print
1990b：『恵庭市中島松5B地点遺跡出土の植物遺体』恵庭市中島松5・柏木川11遺跡 恵庭市教育委員会
- Crowford, G.
1986：『SAKUSHU-KOTONI-GAWA PLANT REMAINS』『サクシュコトニ川遺跡 I, II』所収 北海道大学埋蔵文化財調査室
- Crowford, G. and Yoshizaki
1987：Ainu Ancestors and Prehistoric Asian Agriculture. *Jour. of Archaeological Science*, 14

栽培植物種子が検出された擦文時代の遺跡

遺 跡 名	遺 構 名	時 代	出 土 栽 培 種 子
サクシュコトニ川遺跡 (石狩・札幌市)	カマド・焼土・炭化物層	擦 文 中 期	コメ・オオムギ・アワ・ヒエ・キビ ウリ・アズキ・シソ・アサ・アブラナ科
中島松5B遺跡 (石狩・恵庭市)	カマド	擦 文 前 期	アワ・キビ
南島松3遺跡 (石狩・恵庭市)	住居址内	擦 文 前 期	アワ・キビ
柏木川11遺跡 (石狩・恵庭市)	住居址内	擦 文 前 期	アワ・キビ
香川三線遺跡 (留萌・苫前町)	貯蔵穴	擦 文 後 期	オオムギ・アワ・キビ
香川6遺跡 (留萌・苫前町)	カマド・焼土・貯蔵穴	擦 文 後 期	オオムギ・アワ・キビ・シソ
K-441 N33 (石狩・札幌市)	焼土	擦 文 後 期	アワ・ヒエ・キビ・オオムギ
K-441 N34 (石狩・札幌市)	焼土・炭層	擦 文 後 期	アワ・ヒエ・キビ・オオムギ・ソバ・シソ
札幌遺跡 (渡島・松前町)	カマド・炉・床面 覆土・貯蔵穴・焼土	擦 文 後 期	コメ・オオムギ・コムギ・キビ・モロコシ
二ツ岩 (網走・網走市)	骨塚	オホーツク前期	オオムギ・アワ・キビ

第 I 表

遺跡出土アワの計測(平均値)

遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	1.4	1.2	1.0
香川 6 遺跡	1.3	1.2	1.0
K-441(N34)	1.3	1.2	0.8
中島松 5 B 遺跡	1.3	1.2	0.9

遺跡出土キビの計測(平均値)

遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	1.9	1.7	1.4
香川 6 遺跡	1.9	1.6	1.3
K-441(N34)	1.9	1.7	1.2
中島松 5 B 遺跡	1.8	1.7	1.2

遺跡出土ヒエの計測(平均値)

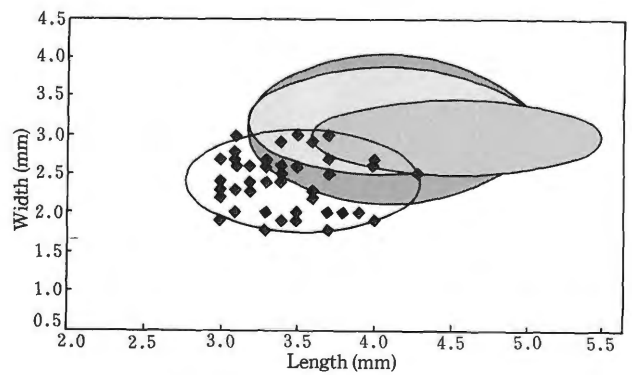
遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	1.5	1.1	0.6
K-441(N34)	1.3	0.9	0.6

遺跡出土コムギの計測(平均値)

遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	3.6	2.6	2.1
札前遺跡	3.3	2.1	1.8

遺跡出土オオムギの計測(平均値)

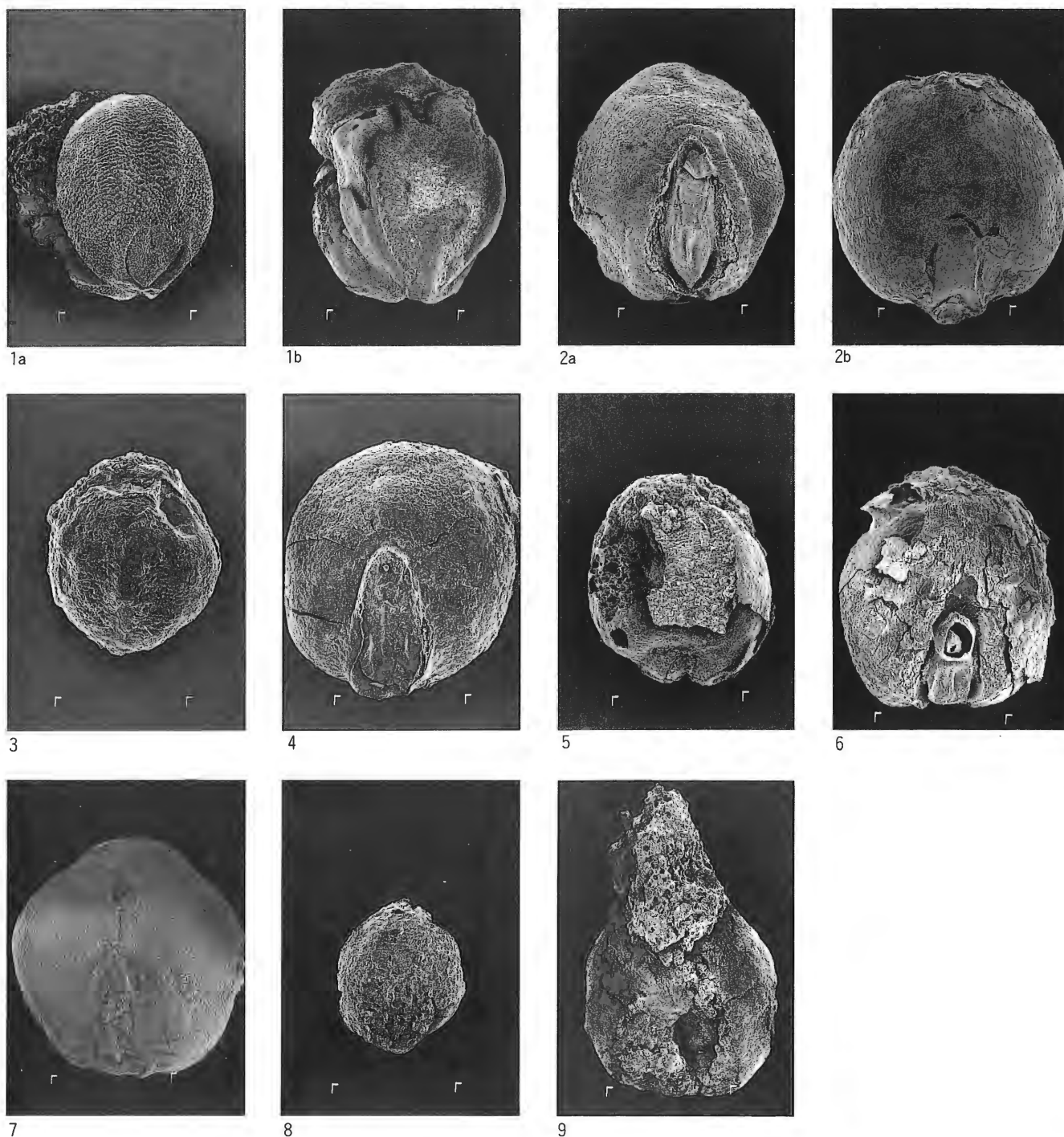
遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	5.3	2.4	1.8
札前遺跡	5.0	2.7	2.0
若月遺跡	4.8	3.0	2.2
網走市二ツ岩遺跡	4.3	2.9	2.4



サクシュコトニ川遺跡出土の小型コムギと他の小型コムギの比較 (G. Crawford 1986による)

- *T. compactum*, Dorestd; ○ 一戸遺跡のコムギ
- *T. sphaerococcum*, Pirak; ◈ サクシュコトニ川遺跡のコムギ

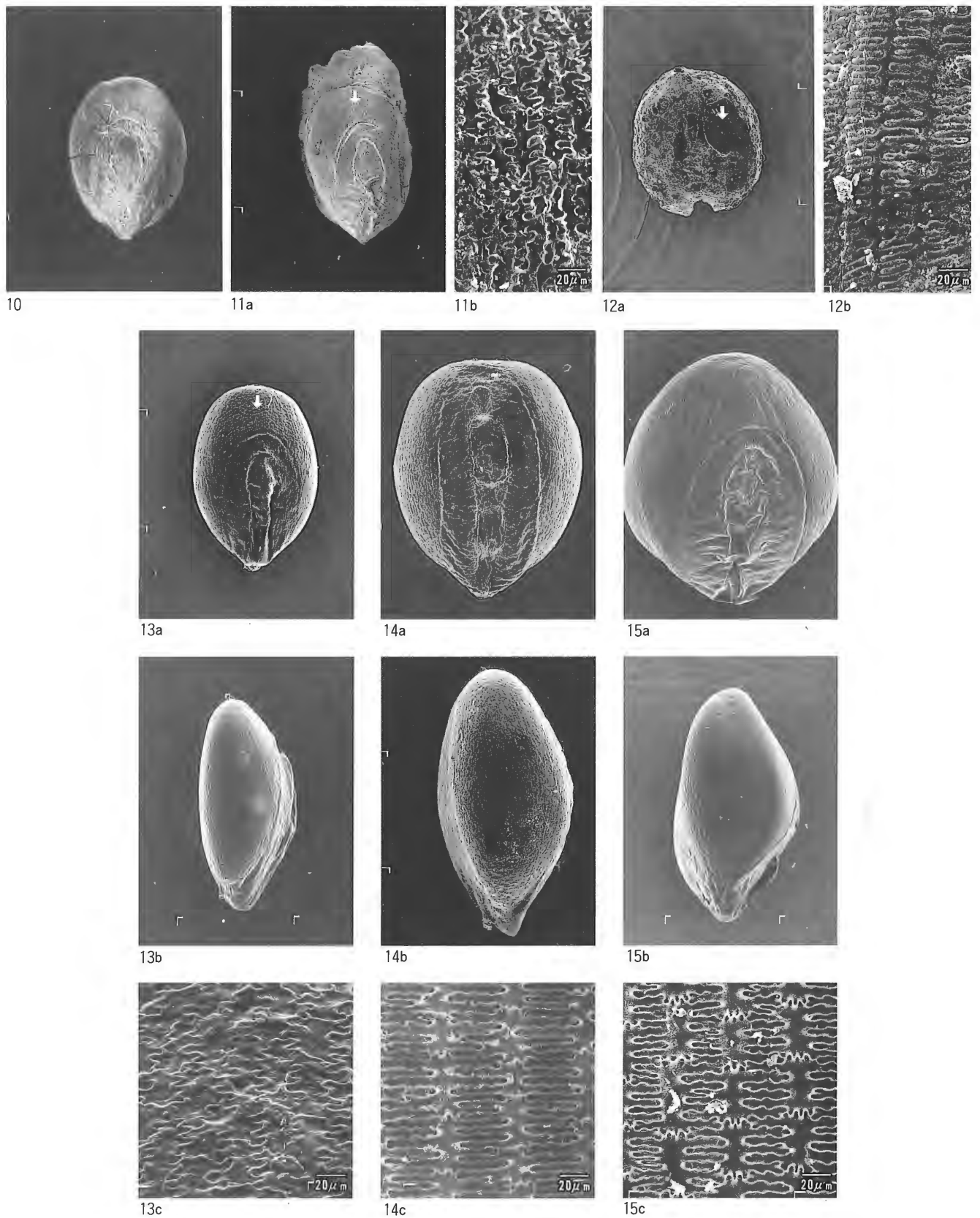
第 I 図 擦文文化にともなった炭化種子



1 a	サクシュコトニ川遺跡出土アワ	背面
1 b	サクシュコトニ川遺跡出土アワ	腹面
2 a	サクシュコトニ川遺跡出土キビ	背面
2 b	サクシュコトニ川遺跡出土キビ	腹面
3	香川 6 遺跡出土アワ	背面
4	香川 6 遺跡出土キビ	背面
5	中島松 5 B 遺跡出土アワ	腹面
6	中島松 5 B 遺跡出土キビ	背面
7	若月遺跡出土キビ	背面
8	網走市二ツ岩遺跡出土アワ	背面
9	網走市二ツ岩遺跡出土キビ	背面

スケール 「」の間隔 1.0mm

第II図 擦文文化にともなった炭化種子



10	サクシュコトニ川遺跡出土ヒエ	背面	14a	現生のタイヌビエ	背面
11a	K-441北34条地点遺跡出土ヒエ	背面	14b	現生のタイヌビエ	側面
11b	11aの部分拡大	穎果の組織	14c	現生のタイヌビエ	内穎の組織 (灰像処理)
12a	K-441北34条地点遺跡出土ヒエ	腹面	15a	現生の栽培ヒエ	背面
12b	12aの部分拡大	内穎の組織	15b	現生の栽培ヒエ	側面
13a	現生のイヌビエ	背面	15c	現生の栽培ヒエ	内穎の組織 (灰像処理)
13b	現生のイヌビエ	側面	スケール	「	」の間隔 1.0mm
13c	13aの部分拡大	穎果の組織			

第III図 擦文文化にともなった炭化種子



16a



16b



17a



17b



18



19

- 16 a サクシュコトニ川遺跡出土オオムギ 背面
 16 b サクシュコトニ川遺跡出土オオムギ 腹面
 17 a サクシュコトニ川遺跡出土コムギ 背面
 17 b サクシュコトニ川遺跡出土コムギ 腹面
 18 サクシュコトニ川遺跡出土オオムギの穂軸
 19 サクシュコトニ川遺跡出土コムギの穂軸
 20 a 札前遺跡出土オオムギ 背面
 20 b 札前遺跡出土オオムギ 腹面
 21 a 札前遺跡出土コムギ 背面
 21 b 札前遺跡出土コムギ 腹面
 22 a 若月遺跡出土オオムギ 背面
 22 b 若月遺跡出土オオムギ 腹面
 23 a 網走市二ツ岩遺跡出土オオムギ 背面
 23 b 網走市二ツ岩遺跡出土オオムギ 腹面
 スケール 「 」の間隔 1.0mm



20a



20b



21a



21b



22a



22b



23a



23b

第IV図 擦文文化にともなった炭化種子



24



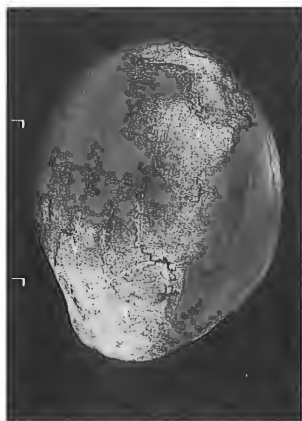
25



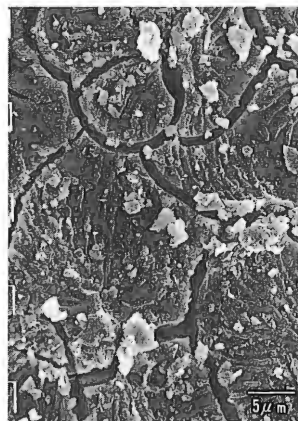
26



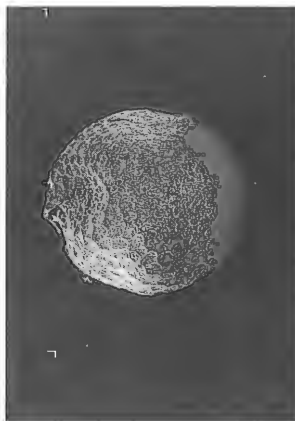
27



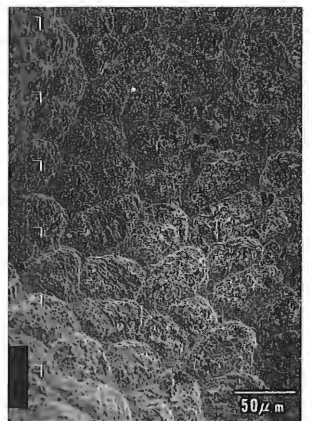
28a



28b



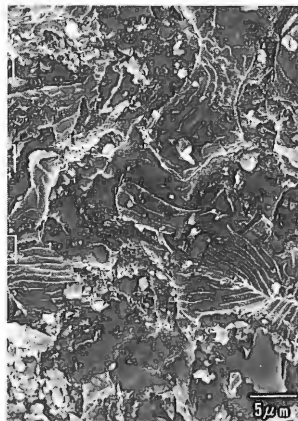
29a



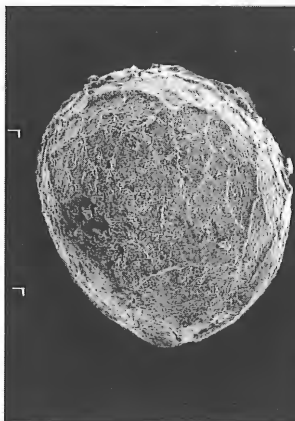
29b



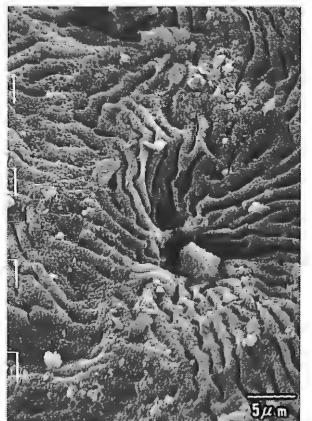
30a



30b



31a



31b

- 24 サクシュコトニ川遺跡出土コメ
 - 25 サクシュコトニ川遺跡出土アズキ
 - 26 サクシュコトニ川遺跡出土ウリ科
 - 27 サクシュコトニ川遺跡出土アサ
 - 28 a サクシュコトニ川遺跡出土シソ属
 - 28 b 28 a の部分拡大
 - 29 a サクシュコトニ川遺跡出土アブラナ属
 - 29 b 29 a の部分拡大
 - 30 a K-441北34条地点遺跡出土シソ属
 - 30 b 30 a の部分拡大
 - 31 a 若月遺跡出土シソ属
 - 31 b 31 a の部分拡大
- スケール 「 「の間隔 1.0mm

あとがき

「北大構内遺跡 8」をお送り致します。平成元年度中は、大規模な調査はなかったのですが、横山氏の報文にある通り、小規模の発掘が繰り返されました。調査室内では、各種の整理研究作業が続行されています。また、国際交流基金の派遣でトロント大学博士課程のキャサリン・ダンドレア嬢が資料研究のため6ヶ月の滞在、同じく同大学のG・クロフォード助教授も資料調査に来室されました。最近では日本国内の研究者のみならず、この様な海外からの研究者の来室も増加して居りますので、新年度からは資料室の整備に一層努力し、ミニ博物館として、いつでも、どなたの要望にも応えられますように致す所存です。

表紙のカットは大学本部施設部の吉田政則氏の手になったものです。

調査室開設以来、調査員として現場の指導や資料の研究にあたってられました横山英介氏は、本年3月末日で退職され、専門研究の道を歩まれる事になりました。プロジェクト委員ならびに調査室スタッフ一同、心から氏の新しいフィールドでのご活躍をお祈りしたいと思います。また、この3年間、調査室と大学本部の間でいろいろと作業調整を行なって下さった施設部総務掛北山秀壽掛長も2月1日付けで放送大学の方にご栄転なさいました。これまでの大変な御苦勞に感謝したいと思います。

吉崎 昌一

北大構内の遺跡 8

平成元年度（1989年度）

平成2年3月25日（1990年発行）

発行所 北海道大学（埋蔵文化財調査室）
札幌市北区北8条西5丁目

編集者 吉崎昌一

印刷所 （株）中西印刷

北大構内の遺跡[8]
HOKKAIDO UNIVERSITY
CAMPUS SITES/1990
北海道大学